

大津まち遺産マップ

大津町家探訪地図 第7版

叶匠壽庵 和菓子
長等2-4-2 ☎077-525-8111

おで湖 居酒屋
中央1-7-18 ☎077-523-4100

あゆら 居酒屋
中央2-6-39 ☎077-522-3601

大津魚忠 懐石料理
京町2-4-10 ☎077-522-4428

御頭処 餅兵 和菓子
中央2-5-37 ☎077-522-7356



元祖 阪本屋 湖魚刺し物販 長等1-5-21 ☎077-524-2406

大津菓子調進所 鶴里堂 和菓子 京町1-2-18 ☎077-523-2662

ホテル舘 大津百町 宿泊 中央1-2-6 ☎077-516-7475

大津魚忠 懐石料理 京町2-4-10 ☎077-522-4428

御頭処 餅兵 和菓子 中央2-5-37 ☎077-522-7356

大津百町 まち遺産マップ

「大津百町（おおつひやくちょう）」とは、江戸元禄時代、大津の町割が100町もあり、その繁栄ぶりを称する言葉とされる。大津の地名は、大きな港(津)由来し、すでに平安時代、都への物資を中継する港として重視されていた。豊臣政権下に大津城が築かれた天正14年（1586）頃、現在の市街地が形成された。関ヶ原合戦で城下町としての役割を終えたと、城は膳所に移され、大津は、徳川政権下で、城下町から商業都市へと変貌。江戸幕府の直轄支配地（天領・てんりょう）として代官が置かれ、宿場町、港町、三井寺の門前町として発展。大津百町は、多様な町の姿を合わせもった複合都市として繁栄したといえます。大津百町のまちを地図を手に、ゆっくり歩いてお楽しみ下さい。

大津町家 コラム 大津町家ものはじめ探訪

大津の中心市街地、いわゆる大津百町には、江戸時代末期から戦前までに建てられた伝統的な建築物である大津町家が多く残っています。東海道五十三次の宿場町でもあった大津は、距離だけではなく文化の嗜好も京都に近いこともあり、大津町家は京町家の特徴を多く持っています。京都は幕末の戦乱期、特に元治元年(1864)の禁門の変の後、京都市中が大火に見舞われ、町家をはじめとする建物の多くが焼失しました。今残る京町家は、それ以降に建てられたものがほとんどですが、幸いにも大きな災害や戦乱に遭うことがなかった大津町家には、江戸後期の京町家の特徴が残っているとも言われており、とても貴重なものです。但し、主要な通りは、昭和初期、滋賀県の道路拡幅事業に伴い、「軒切り」をした建物の正面を削り取ってしまっ改造工事が行われたため、江戸期外観を持つ大津町家は少ないことも特徴のひとつですが、内部は建てられた当初の意匠が多く残っています。もうひとつ、興味深いことは、「軒切り」をする前に、「軒切」前の写真を撮影して、各所有者に渡したことです。その当時、写真はまだまだ貴重であったため、どの写真も当主や高人の、自慢できるものなどと一緒に記念撮影しました。京町通のいくつかの家には、10月の大津祭の宵宮の日に、その当時の写真を表に展示していますので、往時の大津町家の外観を楽しむことができます。なお、この2枚の古写真の町家は、今も街中にあります。

大津の中心市街地、いわゆる大津百町には、江戸時代末期から戦前までに建てられた伝統的な建築物である大津町家が多く残っています。東海道五十三次の宿場町でもあった大津は、距離だけではなく文化の嗜好も京都に近いこともあり、大津町家は京町家の特徴を多く持っています。京都は幕末の戦乱期、特に元治元年(1864)の禁門の変の後、京都市中が大火に見舞われ、町家をはじめとする建物の多くが焼失しました。今残る京町家は、それ以降に建てられたものがほとんどですが、幸いにも大きな災害や戦乱に遭うことがなかった大津町家には、江戸後期の京町家の特徴が残っているとも言われており、とても貴重なものです。但し、主要な通りは、昭和初期、滋賀県の道路拡幅事業に伴い、「軒切り」をした建物の正面を削り取ってしまっ改造工事が行われたため、江戸期外観を持つ大津町家は少ないことも特徴のひとつですが、内部は建てられた当初の意匠が多く残っています。もうひとつ、興味深いことは、「軒切り」をする前に、「軒切」前の写真を撮影して、各所有者に渡したことです。その当時、写真はまだまだ貴重であったため、どの写真も当主や高人の、自慢できるものなどと一緒に記念撮影しました。京町通のいくつかの家には、10月の大津祭の宵宮の日に、その当時の写真を表に展示していますので、往時の大津町家の外観を楽しむことができます。なお、この2枚の古写真の町家は、今も街中にあります。

百町の国登録有形文化財

橋本家住宅（旧正蔵坊）A-2

正蔵坊は、かつて三井寺五別所の一つ「微妙寺」の坊として正保元年(1645)に建造（再興）されたものと推定されています（『園城寺文書』等の資料より）。戦前から既に一般住宅として使われてきましたが、建物の主要部分である本格的な書院造の「一の間」と庭は奇跡的に建設時のまま保存されてきました。登録有形文化財になったのを機に「二の間」を修復し、往時の姿を取り戻しました。また、同時期に築造されたと推定される池庭は、三機式の浮輪や豪華な枯滝を持ち、観音と不動明王を主題とした部分と、洞窟と月窟によって神仙蓬莱の世界を現している部分から構成される大変珍しい庭園です。

※家と庭は、各種イベントの開催時及び見学希望者(事前申込み要)に公開しています。

豆信 B-2

豆信は明治27年(1894)初代今井忠五郎が創業、大正7年(1918)に長女のためにこの料亭旅館を建てました。正面の浜通りが昭和9年に道路拡幅されたため、向かいに住んでいた大工、山岡長兵衛棟梁の手により、軒切りと同時に大改造し、虫籠窓だった正面の外観は、2階建て、ガラス窓の現在の姿になりました。旅館はやめていますが、2階の大広間や洗面など内部にその名残を残しています。現在も料亭として使われ、大津では大変希少な高い料亭旅館建築で、表の門塀など3棟が国の登録有形文化財です。

木村家住宅（内部非公開）B-2

江戸後期より戦前まで材木商を営んでいた木村家は、複数の貸し家、材木納屋などを有していたますが、ほとんど除却され、この主屋など2棟が当時のまま残されています。正面の通りは、昭和初期の道路拡幅がなかったため、江戸末期の町家の意匠である虫籠窓や、つし2階建の、構造を内外にそのまま残す町家です。通りから見ても1階右側の板張仕上げの壁の内側は、出格子部分の板戸が引き込まれるようになっており、これは大津の町家の特徴の一つです。

奥村家住宅（内部非公開）B-2

旧北国海道に面して建てた木造2階建の町家は、奥村次郎氏が昭和8年(1933)に生まれだ跡取りとなる男子の孫 保の誕生を喜び、鹿間町に住む知人で工務店を経営していた大工 福田卯三郎に設計施工を依頼し建てたと言います。昭和10年(1935)の設計書と図面が残されており、使用された材料などがわかります。御影石磨き仕上げの腰壁、浅黄色の大津壁、数寄屋の意匠である南窓の小庇が特徴的です。平成の道路拡幅工事で建物が道路にかかため、平成26～27年(2014～15)曳き家して現在の場所に移築しました。

阪本屋 B-2

明治2年(1869)、膳所木下町にあった膳所藩お抱えの御用料亭「本家阪本屋」から、耐ずしの販売を専門に行う店として分店し、初代内田太七が当地で創業。昭和初期の道路拡幅を機に、昭和11年(1936)2敷地分の土地に店を新築しました。施工した大工は、船頭町に住む山梨政造棟梁で、評判もセンスも良く、表通りの2階の外壁に黒色のモザイクタイルがとも印象的です。また、ミセの和洋折衷の表情を見張るもので、当主と棟梁がこの建物の趣味趣向を凝らして作り上げといった様子が目に浮かぶようです。改造が少なく、建てられた当初と同様に今でも耐ずしを専門に行う店として営業していることも大変貴重です。

大津町家の宿 粹世 B-2

大津町家では初めて宿として改修し開業しました。向かいに住み米商いをしていた吉川定五郎がこの地を購入し、昭和8年(1933)棟梁 岡本万三郎により大家族の住まいとして建てた木造2階建ての町家で、帳場の1階の表に構えていました。通りから見る正面は、昭和初期の御影石磨き仕上げの腰壁と上半分木格子と欄間で構成され、黒い大津壁は建てられた当時のまま、復原されました。2階内部は中廊下形式で、居室は独立性が高く洋間もあり、それをそのまま生かした改修をしており、日本の近代化住宅の様式を今も残っていることができます。

おまつ ちやく ちょう

大津魚忠 C-3

明治38年(1905)、呉服商の住屋として建てられた木造2階建の町家で、現在は料亭となっています。下北国町の大工、横井勝治郎棟梁が手がけた建物で、設計にも優れた才能を見えています。1階の木割の細い虫籠窓や、内部の木の使い方に、横井棟梁の意匠の特徴を見ることができます。昭和初期の道路拡幅に伴い、オモテ部分を軒切りし、その後半部分、曳き家をしました。虫籠窓を残し、明治後期の商家の姿を良く留めています。内部座敷は、柱目を基調とした普請で、当主と棟梁のこだわりが感じられる主屋です。また、庭は近代庭園の先駆者、楳村てと7代目小川治兵衛の作庭です。

小川家住宅 C-3

江戸末期に建てられた間口2間半の町家で、大津の町家としては最小間口寸法と考えられます。昭和初期の道路拡幅時に、屋根の棟の位置を半間手前にしらず、通りに面して軒の高さ1階になるような改造がされています。2階はガラス窓にして大津祭の山笠道行を見物できるようにし、1階の腰付出窓は、下は研ぎ仕上げとして、上は間隔の短い縁格子を入れてますが、昭和初期に流行した当時最先端の技術で造られた意匠です。間取りは、間口1間のトオリニと1列に並んだ4室のザシキで構成されています。内部も昭和初期に改造されていると思われますが、荒柿さん、おくどさん、井戸が残されています。
※公開施設ではありませんが、在宅時は、内部を見せていただくことができます。

清水家住宅（内部非公開）B-1

旧北国海道から路地を入ったところに、数寄屋の意匠を感じる近代和風住宅があります。小屋裏の棟木に、大正15年12月上棟の墨書があり、内部の状況から元は西隣と一体の長屋住宅で大きく改造したことが分かります。当時は、琵琶湖が目の前まで来ており、2階の座敷の縁に大きくガラス窓を設けた理由です。建築主は古澤豊治郎、昭和24年に清水仙太郎が取得、現在は、〇瀧(わび)として、住居兼飲食店・民泊をされています。

初田家住宅（内部非公開）C-3

主屋や、東の通りに面する塀などが国の登録有形文化財で、いずれも江戸末期の建築と伝えられています。主屋は当初はつし2階建てしが、昭和9年の道路拡幅時に軒切りして、2階建に改造。その際、大津祭の曳山巡行を見物するため、2階のオモテマを座敷化しました。巡行の際には、ガラス窓を取り外し、広く開口部を、毛氈(もうせん)を垂らして見物します。また、角地にあるため、煙出しの小屋根(越し屋根)がよく見えます。また、東の通りに見える主屋側面の妻壁と屏風を束せた高塀の焼杉板が印象的です。

佐野家住宅（内部非公開）C-3

主屋は、鬼瓦銘や棟札から天保9年(1838)年に大工、若佐棟梁より建てられた木造2階建の町家です。通りから見える正面は、昭和初期の道路拡幅時に大きく改造され、近年に手が加えられていますが、内部には貫の高い広間の座敷があり、当時の大工の粋や、多くの絵師文人のハトリだった建築当時の当主の文化に対する造詣の深さが偲べれます。

森本家住宅（内部非公開）C-2

主屋は木造2階建の町家で鬼瓦銘から嘉永2年(1849)、棟札から大工、吉左衛門棟梁より建築されたことがわかっています。現在は、主家の手前小門構えのある塀と前庭がありますが、建設当初は、表屋造りという形式の大型町家でした。当初は、初期の道路拡幅で形式が張られましたが、現在の状況から推定すると、当時の当主が石工だったこともあり、土置や庭石をふんだんに使用した現在の姿になりました。角地にあるため、石蔵のように涼陰で大造とした側面の妻壁も印象的で、煙出しの小屋根(越し屋根)もよく見えます。内部には大広間があり、以前は琵琶湖の景色がよく望めたことですよ。江戸末期の主屋と昭和初期の門塀が国の登録有形文化財です。

大津市旧大津公会堂 C-2

昭和9年(1934)に建設された旧大津公会堂は、名称や用途様々に変えながら市民の交流の場として親しまれてきました。縦長の窓など直線的なデザインを基本に、丸窓や半円形のアーチ窓が設けられ、外壁には昭和初期に流行した縦線模様のスクラッチタイルが張られている鉄筋コンクリートの公共建築で、国の登録有形文化財です。平成15年から地権者を中心に起こった保存運動の後押しを受け、大津市の中心市街地の賑気を取り戻すための集客交流拠点として整備され、建築当時の洋館の雰囲気をそのままに、平成22年に飲食店が入った交流・商業施設として大きく生まれ変わりました。

滋賀県庁本館 D-3

戦前最後の大建築で、昭和14年(1939)に竣工。昭和12年(1937)に軍需資材の節約のために施行された「鉄鋼工作物築造許可規則」を問一髪すり抜けて建設されました。設計は日比谷公会堂や大隈記念講堂などを手掛けた佐藤一と大阪で国校工務所を営み、濃密な装飾を凝らす作風を知られた國枝博のふたりで大工棟組です。大きく翼部をのびた水平感と柱の線の反復とのバランスや内部の装飾が素晴らしい、格調を持ったまさに京政を司る機関に相応しい近代建築物といえます。鉄筋コンクリート造4階建ですが、正面中央の塔屋部分には5階があり、明治23年(1890)4月、琵琶湖鉄水開通時に明治天皇行幸の際、旧県庁の正庁が御座所となり、これを保存すべく、聖蹟記念堂として移築されています。

宮本家住宅（内部非公開）B-4

昭和5年(1930)、ヴォーリス建築事務所の設計、長等らの石倉工務店の施工で完成した木造2階建の洋館住宅です。宮本文治郎はウィリアム・メリル・ヴォーリスが明治38年(1905)滋賀県立商業学校(現八幡商業高等学校)に着任した際、通訳を務め、その後実業関係にもあります。屋根はペイイン瓦葺き、外壁はスタッコ塗、縦長窓や半円アーチ窓を並べ、煙突を二本設けています。居間から琵琶湖が一望できるように工夫され、食堂兼台所は使いやすさを重視、建物と調和が図られた建具・調度品も保存されており、周囲の古いコークや暖炉、緩やかな階段などにヴォーリス建築の特徴がよく残っています。

旧多田家住宅（内部非公開）C-3

下石町の小路にある間口3間半の町家で、いつ誰が建てたか定ではありませんが、戦後独立して呉服の商いを始めた多田庄一はこの町家をとても気に入り購入しました。1階に出格子、駒寄、2階に虫籠窓、袖卯建といった明治期の大津町家の特徴である意匠をよく残しています。内部トオリニも、黒いモザイクタイルを使ったおくどさんや井戸があります。

ホテル講 大津百町（橋和田家住宅）C-3

元は呉服大物商「近江屋」であった上野新右衛門家の主屋で、旧東海道に面して建つ間口のある町家です。昭和7年(1932)向かいに店をとり、敷地奥に移転、東1間半を撤去し通路をつくり、敷地奥に二戸一の長屋建てを3棟、計6軒の貸し家を増築し、主屋は3軒に分けられました。そのうちの東2軒を戦後、橋和田倫次郎が取得。昭和後期に鉄板で覆ったいわゆる看板建築になりましたが、その後撤去、平成29年(2017)に木の家専門店 谷口工務店に1階一部と2階を貸して、ホテル講 大津百町「近江屋」となりました。

丸亀家住宅 川上家住宅 柴山家住宅 藤原家住宅 C-3

昭和7年(1932)に、上野新右衛門が長屋敷に建てた二戸一の長屋建てを3棟、計6軒が、戦後売買され、それぞれ変遷を経て、現在の所有者の住まいとなりました。旧東海道から路地に入る道路の喧嘩が少し静まり、独特の雰囲気包まれます。隣り合わせの丸亀家住宅（tsutsu sake ninogo）と川上家住宅、柴山家住宅はホテル講「大津百町「鍵屋」と二戸一、藤原家住宅は二戸一が1軒になっています。意匠も棟ごとにしらず異なり、センスを感じます。

百町の近代建築物

日本聖公会大津聖マリア教会 C-3

日本聖公会京都教区の「大津講義所」として、明治24年(1892)に本格的に伝道が開始されました。その後、「淡海基督教教会」、「大津基督教会」、「大津聖公会」など、たびたび教会の名称変更はありましたが、昭和6年(1931)に大工、宮川庄助棟梁により、現在の場所に礼拝堂が落成、戦中の混乱にも耐え、礼拝、伝道の場として活用されてきました。京阪浜大津駅から徒歩8通りを上ると、青緑色の三角屋根と十字架が正面に見え、2階の木製の上げ下げ窓、玄関欄間の鳩のステンドグラスが印象的です。

日本基督教団大津教会・愛光幼稚園 C-3

昭和3年(1928)、ヴォーリス建築事務所の設計、長等らの石倉工務店の施工で完成した木造2階建のキリスト教会です。教会の南側に幼稚園が併設されています。教会正面右側の鐘塔と玄関はひときわ特徴的で、渦巻き状の持ち送りや、浮き彫りの敷章が、凝ったつくりとなっています。鐘塔は上部に二連のアーチ型窓に付くロマネスク風です。ヴォーリスは教会を、満ち足りた子供教育に情熱を燃やしましたが、この建物はそんな夫妻の理想を表現したものであるでしょう。施工を請い付った石倉四郎棟梁は、教会の信者であり、他にも大津市内にヴォーリスの設計で教会関係者の自宅を施工しています。

カトリック大津教会 F-4

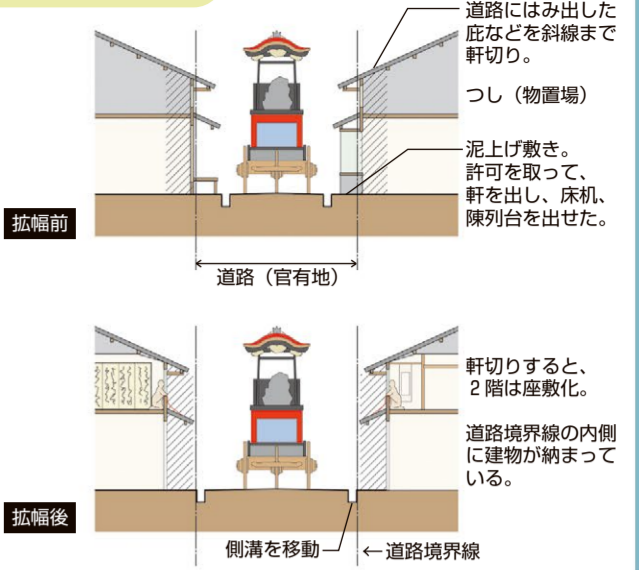
京都のあまりか屋が大林組の下請けとして施工、昭和14年(1939)に竣工した洋館です。外観は、普通の教会と異なり、日本建築そのものですが、これはパーソン司教の信念によるもので、信仰の土着化という立場から教会の建物は日本風のものであるべきだという考えに基づき建設されました。聖堂はバシリカ式の教会を基本として、変化に富んだ青瓦の屋根は印象的で、内部にはカラフルなタイルを多用し、とても美しい建物です。布教のために日本人に親しみのある教会を造ろうとしたパーソン司教の思いを建築技術者が匠に表現した建物といえるでしょう。

大津町家 コラム 外観の違い

大津町家の外観は、時代の異なる2つのタイプがあります。ひとつは軒切りの必要がなかったため、建てられた当時の意匠を残しているタイプで、多くは江戸末期や明治期の外観です。1階に「出格子」や「はたり床札」、2階に「虫籠窓」や「袖卯建」があります。もうひとつは、昭和初期に軒切り改造工事が行われた際に、新しい意匠や材料を取り入れた外観です。1階に「腰付出窓」、2階に「ガラス窓」「肘掛」があります。特に「腰付出窓」は、雨で濡みやすかった「出格子」の改良版ともいえ、腰部分に御影石を用いたものが主流ですが、御影石に似せた「人造石磨き仕上げ」という右官性上げや、小さな正方形のモザイクタイルを貼ったものもあり、昭和初期にはいろんな方法が試されてきたことが分かります。通りから違いを楽しみながら、町歩きするのー興です。

大津町家 コラム 大津町家『軒切り』の真実

通りに面した大津町家の外観は、昭和初期に大きく変わりました。浜通り、京町通り、中町通りの順に、道路拡幅工事が実施され、町家の正面を取り除くことになったのです。これは大津に限ったことではなく、日本の多くの町が近代都市となる過程で行われ、地元では「軒切り」という言葉で伝わっていますが、その実態は忘れられてしまいました。この道路拡幅は正確に言うると「軒下地として利用していた軒下道路敷きの占取消しに伴う道路拡幅」といいます。それまで、町家の軒下地は、官有地つまり道路の一部で、雨水の側溝が今より道路中央寄りにありました。現在のように道は舗装されていないので、側溝に溜まる泥掃除は町家の住民がしていました。側溝から上げた泥を仮置きした軒下を「泥上げ敷き」といい、代わりて占用の許可を取れば、ばったり床札や、陳列台、庇を設けることができました。昭和初期、交通手段が馬に代わり道路を広げる必要性が高まり、泥上げ敷きを廃止し、側溝を道路境界線寄りならずし、実質的な道路拡幅を図ることになりました。道路所有者である滋賀県や大津市から各家に「占用を取り消すので、1年以内に軒下地として利用している部分を除却せよ」という文書が出されます。これにより、多くの町家は「軒切り」という形で町家を切り縮めることになったのです。軒切りせずには内部でゆるい改造や、建て替えたところもありました。右図のように、軒切りした町家は、虫籠窓からガラス窓に変えて、2階のオモテはつし(物置場)から居室となります。さらに大津祭の曳山巡行路に面する町家では、床の間を設けて座敷化し、2階から曳山を見るようになりました。



百町の社寺・史跡

園城寺（三井寺）A-1

天台宗真宗総本山。大友皇子の子、与多王(よたおう)の寄進により創建し、後の明徳弘治4年(866)円珍が天台別院として再興した。同寺の湧水を天誓・天武・持統の三天皇の産湯としたことから御井寺(みいのてら)と呼ばれています。国宝の金堂を始め、数多くの指定文化財の建造物を建並んでいます。

小関越道標 A-2

小関越から園城寺(三井寺)への分岐点に立ち、「左り三井寺　是より半丁」「右小関越三条五采いまくま　京道」「右三井寺」と刻まれています。西国三十三所観音巡礼の三井寺と今熊野野宮寺を指すことから、この道が巡礼道であったことを示しています。市指定有形民俗文化財。

長等神社 A-2

天智天皇が大津を鎮座として、須佐之守命を長等山に祀られたのが創建。貞観2年(899)日吉山王宗を勧請した園城寺の守護神となりました。明治38年(1905)竣工の楼門は市指定文化財。境内の馬神社は「馬の神社」として知られています。

琵琶湖疏水 B-2

明治時代、琵琶湖の水を京都へ通すために作られた水路で、京都市の飲料水・発電や物資輸送、農業用水などに利用されるために立案された。第1疏水は田邊邦部の設計監督のもとで平成23年(1890)に完成。第2疏水は、明治45年に完成をみえています。令和7年(2025)には、国宝・重要文化財に指定されました。

近松寺（高観音）B-3

園城寺(三井寺)の五別所の一つで、別名は高観音。建築は、本堂は享保元年(1716)、阿弥陀堂は嘉永3年(1805)で、市指定文化財です。本堂は江戸時代の仏堂形式を知る上で貴重です。また、ここから見える琵琶湖と大津の町は、古くから人々に親しまれています。

本長寺 B-3

永禄5年(1562)、等覚院日住上人により創建された日蓮宗寺院。大津代官であった小野、石原両氏の菩提寺で、境内の墓地には小野氏歴代の墓が並んでいます。また松尾芭蕉の門人で、大津の医師であった江左尚白(えさよ)の墓もあります。

大塚の樺 B-3

本願寺中興の祖である蓮如(1415～1499)が大津に滞在し、法敵に毒殺を謀られたとき、身代りとなって死んだ忠実を葬った塚に植えられたと伝えられます。この伝承によれば、樹齢は500年を超えることとなります。市指定文化財。

大津津本陣跡 B-3

本陣は、江戸時代に宿場におかれた大名などの宿泊施設。大津宿には2軒の本陣があり、この地はその内の大塚嘉右衛門宅です。当時の本陣は3階の楼上からの琵琶湖の眺めが絶景だったといわれています。建物は現存せず、本陣跡の碑や明治天皇聖跡碑が残っています。

関寺の牛塔 B-3

長安寺境内にある石造宝塔。昔この地に関寺という大寺がありましたが、平安時代中頃に地震で倒壊。復旧工事の際、仏の化身である一頭の牛が資材運搬を手伝い、完了と共に死んだことから、供養のために建てられたといえます。高さ3.3メートル。鎌倉時代のもので、国指定重要文化財。

関幡丸神社 B-4 別図

小野守守により822年に旅人を守る神を祀つたのに始まるようです。平安中期には、琵琶法師・歌人である辨丸が祀られたようになり、音曲芸能の神として信仰されるようになりました。逢坂一丁目に上下の二社があり、下社の時雨庵は国指定重要文化財です。

逢坂の関 別図

古代から交通の要所とされ、延暦14年(795)には関所の前身ともいえる施設が置かれ、その後、平安時代の中頃に是不破・鈴鹿と並ぶ三関の一つとして朝廷に重視されています。現在の峠には、開闢碑とともに逢坂関記念公園が整備されています。

旧逢坂山隧道（トンネル）別図

鉄道通関にあたる明治13年(1880)、大津・京都間に完成した全長664メートルのトンネル。当時、鉄道敷設は外国人が指導していましたが、日本人のみの手で施工された日本最初のトンネルとして、鉄道記念物に指定されています。大正10年(1921)の路線変更により廃止され、現在は東口ののみが残っています。

大津城跡 C-2

天正14年(1586)頃、豊臣秀吉の家臣浅野長吉(長政)により築かれた城。今の明日郎浜大津の湖岸側一帯が本丸でした。慶長5年(1600)の關が原合戦を東軍(家康軍)の勝利に導いた大津龍藏戦は有名です。合戦後、天守は彦根城に移築されました。

彦田稲荷神社 C-2

江戸時代、浜通り一帯には幕府や諸藩の蔵屋敷が立ち並んでいました。このあたりは、菅根藩の蔵屋敷があったところで、元はその敷地内に祀られていたと伝えられています。

大津事件の碑 C-3

明治24年(1891)、来日したロシア皇太子ニコライが、警備中の巡査津田三蔵に斬りつけられた事件。ロシアを恐れる明治政府は、津田三蔵を大逆罪で死刑にするよう迫りましたが、大審院長の児島惟謙の主張により、刑法どおり無期徒刑とし、司法権の独立を貫きました。事件現場には、「此附近露皇太子遭難之地」の碑が残っています。

大津御用米会所跡 C-2

江戸時代、大津には北国・東国の諸大名の領地から、年貢米を始めとする大量の物資が琵琶湖水運によって集められていました。この場所には、大津御用米会所が設けられ、米の相場たち、盛んに取引が行われていました。今でも残る石置に往時の米取引の面影が偲べれます。

蛭子神社 C-3

由来は不詳ですが、坂本に神宮社の神木が倒れ、この木から神像を作り、これを祀っていますが言われています。かつては「胡神社」、「夷神社」とも記したと言います。また、4月3日の日吉山王祭の大大神事の際して、天孫神社への渡御の途中、大樹はこの神社に立ち寄り祈禱が行われます。

大津別院 C-3

浄土真宗大谷派の別院。慶長5年(1600)に石山本願寺で織田信長に徹底抗戦した教如(きょうよ)が創建。本堂は寛安2年(1649)の建築です。また書院は、寛文2年(1662)の大地震で倒壊後、同10年に再建。書院は桃山建築の素簡らしさがよく表れています。本堂、書院は国指定重要文化財。

華階寺のいちょう C-3

中央大通りの分離開立つ2棟のいちょう。道路建設前、この場所は華階寺境内でした。天文元年(1532)、華階寺の開基とともに、植えられたと伝えられます。今も大津駅前のシンボルとして偉容を誇りますが、湖上交通の盛んであった頃も、よい目標とされていたようです。市指定文化財。

天孫神社 C-3

天孫神社は、かつて四宮神社・天孫四宮大明神と称され、明治初年に現在の社名となりましたが、現在も「四宮さん」の名で呼ばれています。秋の例祭は湖国三大家祭の一つとして数えられる「大津祭」です。令和7年(2025)には「大津祭の祭礼行事」が、ユネスコ世界無形文化遺産に追加登録されました。

小舟入の常夜燈 D-3

文化5年(1808)、京都の講中が伊勢両宮の常夜燈として立てた。このあたりには、かつて琵琶湖の入江があり、石置燈は船の目印となっていました。基壇部分には京都と大津の世話人・石置の名前が刻まれています。市指定有形民俗文化財。

石場の常夜燈 E-3

石場と大津の矢橋(やばせ)間の渡船の目印として、幕末の弘化二年(1845)に大津・京・大坂などの船仲間によって建立された、高さ8.4mの常夜燈。湖岸の埋め立てとともに2度移転しました。

平野神社 E-4

創建は大津宮の頃と伝えられ、7世紀の中頃、皇極(こうぎょく)天皇の代に京都西河院渡野井にまつられた瀧脚(たけの)の神、精大明神を松本の狐谷に移し、後の天正2年(1574)現在地に再興されました。毎年8月9日、古式ゆかしい齋講の奉納があります。

義仲寺 E-4

義仲寺は源義仲(木曾義仲)を葬った塚のあるところから名付けられています。また、松尾芭蕉が滞在し、元禄7年(1694)、大坂で客死すると遺言により葬られたことでも知られます。境内は国指定史跡。